

# 井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話をお聴く（二）

聞き手 狩野 啓子（久留米大学文学部国際文化学科）  
筆録・編集 大庭 卓也（同）

## 経営難と日本製籃胎漆器への決意

**狩野** 井上さんが、このお店を継いだのはいつですか。

**井上** 三十六歳のときだから、昭和六十一年（一九八六）のことです。私が継いだ頃は、店が大赤字になった年で。中国から輸入しようかすまいかと、親父も相当に悩んでいた時で、「もう後は、お前が考えてやれ」と言っている。

**狩野** 中国で完成の手前まで仕上げたり、製品として仕上げた籃胎漆器を、井上さんのお店で売るのはどうかと言うことを。

**井上** そうです。結論としては、それをしなかつたんです。確かに、中国から輸入すれば、ずいぶん安く仕入れられるけれども。私には営業能力がない

ね。それと、お客様にこれを一所懸命作りましたと言って商品を勧められるというのは、やっぱり幸せですね、結果的に儲かっているのかどうかは別にして、こうやって売らせてもらっているということが、幸せですね。

**狩野** 輸入品の籃胎漆器は、ほとんど黒のなかに朱色を研ぎ出したものだと聞いてますが、井上さんのお店では、色々な色合いの漆器があるんですね。

**井上** ええ。なにせ、私が三十歳ぐらいの頃には、親父が「こりゃもう食べられんばい」と言って大騒動でしたから。「このままではいかんから、お前が考えろ」と言われて。

**狩野** それで、輸入品にはない色のものを。

**井上** はい。福岡県福岡工業試験場の倉富敏之先生に色々アドバイスを頂いてたんですが、先生が、「こうなふうに作って見たら？」とおっしゃって、真っ黒の艶消しに仕上げた大分県の日田の下駄を見せて下さったんです。杉の下駄なんだけど、焼いてあって、木目のところが籃胎漆器みたいに凹凸になってるんです。きれいだなあと思って、まず、黒の艶消しの籃胎漆器を作ってみました。ところが、お客さんから、プラスチックみたいやねと言われて。それで、そのほかの色も作ったんです。

**井上** どうですかね。それで、紫研ぎ、赤研ぎの次に錆仕上げを作りました。これは、錆という目止めの漆器の仕上げをせずに、最初に黒を塗って、そして錆をしたら、こういう模様が残るんですよ。

**狩野** 井上さんが、そのほか籃胎漆器を作るうえで目指されていることは



赤松社製の丸盆（井上氏蔵）。黒い部分は錆塗（ひびぬり）という技法。久留米にはこの塗りを出来る職人はもういないと言う



同 部分拡大

ものですから、仕入れたところで、他の籃胎漆器屋さんのように、全国規模で売るなんてことは、とてもできないだろうと。売って初めて収入になるんですからね。じゃあどうやって生き残ってゆこうかと考えたときに、従来通りに、自分のところで籃胎漆器を作ってゆこうと。久留米製、日本製の籃胎漆器にこだわってゆこうと決めたんです。だから、伝統を守らなければいかんとか、そういう高尚な話じゃないんです。実際のところ、そうでした。それじゃあ、日本製だけで商売するとして、何が強みになるのかなと考えました。お客さんの意見や要望に応えながら、試行錯誤して色々な漆器を作っていたら、何とか食べてゆけるんじゃないかと。おかげさまで、何とか店は潰さずに今までやってこられましたけれども。

**狩野** なるほど。そうだったんですね。日本製の籃胎漆器だけで勝負すると決断したことについて、いま振り返って、どう思われますか。

**井上** 良かったなと思いますよ。やっぱり良かったですよ。いま私たちの塗り場に八十九歳の方がおられます。私が生まれる前から、うちの店にいらっしやってる人なんです。そういう方たちと、未だにこう作りましようか、ああ作りましようかと言って、漆器を作る幸せというのは得難いものです

**狩野** どんな色を作られたんですか。

**井上** 紫研ぎとか、赤研ぎとか——。その当時、私が四十歳前後の頃、だから三十年ちよっと前、平成の始め頃ですね。艶消しとかマット仕上げというのが、流行ってたんです。何人かのお客さんからも、「マット仕上げにしたらどうか？」と言われたんで、じゃあそうしようか、ということ。

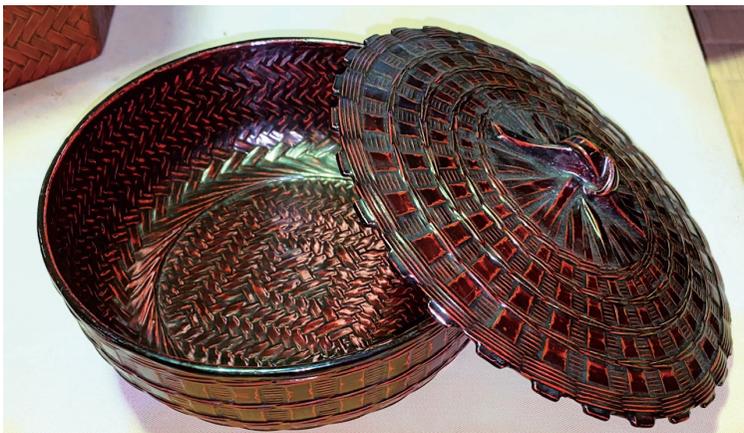
**狩野** 塗り方にも流行があるんですね。使うほうで飽きてくるんですか。

ございますか。

**井上** そうですね。こんなことを言っているいかどうか分かりませんが、大衆用じゃなくて、籃胎漆器の良さを分かっている人を相手に、もつともつと良いものを作りたいと思っているんです。しかし、籃胎漆器の製作は、各工程を受け持つ職人の総力戦ですから、例えば、塗りが上手であつてもですね、竹籠と下地が悪かったらだめなんです。全体の技術を底上げするというのは、なかなか難しいですね。そういうことを実現するのは、私が生きている間には、無理だろうと思っておるんですけども。

**狩野** そうですか。井上さんがいろんなものを作っていて、これは良いものが出来たと思うことはありませんでしょう。

**井上** あまり無いです。どこかが不満ですよ。自分の頭の中には、籃胎漆器だといえるものはこうなんだという目標がありますから。すると、ここは良いけど、ここが及んでないということが見えてくる。どれも自分が思い描いているところには、なかなか及ばないんです。



赤松社（明治十六年、旧久留米藩主有馬氏の出資で設立された殖産組織）製の蓋物（井上氏蔵）。精緻な生地編みがすばらしい

**狩野** 物が関わってくるとやはり難しいですね。これが藍胎漆器というイメージは、言葉で表現できませんか。

**井上** 言葉ではちょっと無理ですね。やっぱり戦前のもの、第二次大戦以前に作られた藍胎漆器からは、どうしてこんなことが出来る職人がいたんだろうという感じますね。ごまかす訳ではないけれども、作品全体から感じられることです。

**狩野** 作品の全体から。

**井上** 要するに、世の中だろうと思います。その頃の世の中が、そういう職人と技術を育てていたんだろうなあと、つくづく思いますね。これから先の時代は、どうなるのかわかりませんが、メイド・イン・ジャパンというものが世界から認められた時代から、今はもうそれほどなくなってきて、物によっては輸入品がほとんどになったりして……。あの時代だったから、昔の人は、ああいう精巧な物を作れたんだろうなと。

**狩野** 物を生み出す素地として、世の中が大切なんだと。

**井上** そう思いますよ。現在ではそんな物をつくるのは無理だと思います。そんな物を目指しておいたらとても食べてゆけないです。だって、職人が

ごく普通の生活を営むための手間賃をいただくとして、昔のような至れり尽くせりの品物を作ったら、まあ物にもよりますが、何十万円になります。今の世の中、それだけのお金を漆器に払って下さるかたは、ほとんどいないと思います。

**狩野** こういう仕事は、当時の世の中からしか生み出せないと。

**井上** こうしたものを目標にしようという気風が、職人さんたちにあったというところは、あの時代ならではのことだったんだろうと。

**狩野** そしてそれを、ちゃんと喜んで使う人もいた。

**井上** そうですね。作る人と、使う人とがいたんですね。(続く)

日本製藍胎漆器  
井上らんたい漆器  
福岡県久留米市小頭町六・二三  
〇九四二・三九・五四五四  
<https://www.inouerantai.jp>



### 久留米大学文化財保存科学研究部会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町1635

<http://kurumbunkazai.jp/>

令和4年3月20日発行

印刷：城島印刷株式会社

〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番6号

## 伝統工芸の国・筑後

### 第四号

井上正道氏（藍胎漆器塗師）の話聴く（二）